第５１回宮崎県小学校教育研究会社会科部会

夏季特別研修会　資料

令和４年８月８日（月）

目　次

１　宮崎県小学校教育研究会社会科部会　研究主題　・・・・・・・・　１

２　学年部別研修会資料

⑴　第４学年　宮崎市立清武小学校　指導教諭　三角　友香　・・・・・・・・１８

⑵　第５学年　新富町立上新田小学校　教諭　中原　英之　・・・・・・・・２０

⑶　第５学年　延岡市立東小学校　教諭　那須　真衣子　・・・・・・・・２２

⑷　第６学年　都城市立祝吉小学校　教諭　大﨑　美穂　・・・・・・・・２４

⑸　第６学年　椎葉村立椎葉小学校　教諭　山田　愛　・・・・・・・・２６

宮崎県小学校教育研究会　社会科部会　研究主題

自ら学び，考え，社会を拓こうとする子どもを育てる社会科学習

～思考力・判断力・表現力を育む授業を通して～

Ⅰ　主題設定の理由

現代社会は，情報過多・国際社会の進展や価値観の多様化など，人々の生活環境がめまぐるしく急速に変化している。また，グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により産業構造や雇用環境が急速に変化し，さらには急激な少子高齢化が進行する中で，次世代を切り拓く子どもたち一人一人が，個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことのできる“持続可能な社会の形成者”として，豊かにたくましく成長していくことが期待されている。

このような社会であるからこそ，民主的，平和的な国家・社会の形成者としての自覚をもち，自他の人格を互いに尊重し合うこと，社会的義務や責任を果たそうとすること，社会生活の様々な場面で問題解決に向けてよりよい方向を考えたり公正に判断したりすることなどの態度や能力が，子どもに身に付いていくようにしなければならない。将来の主権者にふさわしい公民的資質の基礎を育てること，つまり，よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を育てることをめざす社会科の役割は，ますます重要になっていると考える。

学習指導要領の社会科の目標には，「社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。」と示されており，小学校社会科において育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」の３つの柱に沿って明確化し，社会的事象の見方・考え方を，資質・能力全体に関わるものとして位置付ける方向で教科の目標の改善が図られている。

近年の宮崎県の児童の実態を見てみると，資料を読み取ることをはじめ，読み取った事実から，考える・判断する・表現するといった社会的な思考力・判断力・表現力を育てていくことが大きな課題となっている。

これまで本県小社研では，平成２７年度より，研究主題を「自ら学び，考え，社会を拓こうとする子どもを育てる社会科学習」，副題を「思考力・判断力・表現力を育む授業の構想」とし，問題解決的な学習を核とした単元構成及び授業構成に関する研究を進めてきた。県内各地区での授業実践や研究発表等を通して，県内の先生方に授業構想の基本的な考え方は少しずつ浸透してきているものの，今回の夏季特別研修を通して，さらに社会科の授業の在り方について情報発信を行っていきたいと考えている。また，令和３１年度に開催される小学校社会科の全国大会に向けても研究や準備を進めていきたいと考えている。

そこで，これまでの研究の基本的な考え方は継続しながらも，問題解決的な学習を取り入れた授業実践により重きをおきたいという考えのもと，令和元年度より副題を「思考力・判断力・表現力を育む授業を通して」と変更することとした。このように，思考力・判断力・表現力を育む具体的な授業の在り方について研究を進めるとともに，授業実践を積み重ねながら，指導方法の工夫・改善を図ることにより，「自ら学び，考え，社会を拓こうとする子どもを育てる社会科学習」をめざしたいと考え，本主題及び副題を設定した。

Ⅱ　主題設定の基本的な考え方

1　社会科で育てたい「資質・能力の基礎」とは

○　**生きて働く「知識・技能」の習得**

地域や我が国の国土の地理的環境，現代社会の仕組みや働き，地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解するとともに，様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

○　**未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成**

社会的事象の特色や相互の関連，意味を多角的に考えたり，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて社会の関わり方を選択・判断したりする力，考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。

○　**学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養**

社会的事象について，よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに，多角的な思考や理解を通して，地域社会に対する誇りと愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚，世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。

2　自ら学び，考え，社会を拓こうとする子どもとは

【自ら学び，考える子どもとは】

○　学習や生活の中で，社会に見られる課題をつかみ，知識と技能を活用して主体的に考え，表現しながら課題を解決しようとする子ども

【社会を拓こうとする子どもとは】

○　学習したことを生活に生かし，よりよい社会を考え続ける子ども

3　思考力・判断力・表現力を育む必要性とは

○　生涯にわたり学習する基盤が培われるよう，基礎的な知識及び技能を習得させるとともに，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力その他の能力をはぐくみ，主体的に学習に取り組む態度を養うことに，特に意を用いなければならない。

（学校教育法３０条２項より）

○　公民としての資質・能力の基礎の育成～「思考力・判断力・表現力等」

「社会的事象等の意味や意義，特色や相互の関連を考察する力，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて構想する力や，考察したことや構想したことを説明する力，それらを議論する力」の基礎を育成することを求めている。

（学習指導要領　社会編より）

○　「説明」，「論述」，「解釈」，「判断」，「読み取り」，「表現」といった「言語活動」の手立てを意図的に位置付けた授業展開を行い，「思考力・判断力・表現力」を育成することが大切である。

（宮崎県教育研修センター資料より）

4　思考力・判断力・表現力とは

☆「思考力・判断力」・・・社会的事象の特色や相互の関連，意味を考える力

子どもがもっている知識や資料活用などで得た情報をもとに，「比較」「関連」「総合」などの思考方法を駆使して学習問題を追究・解決するために考える力

☆「表現力」・・・社会的事象について調べたことや考えたことを表現する力

子どもが観察や資料活用などを通して調べたことや考えたことを言語などで表現する力

【子どもの発達段階から（学習指導要領より）】

○　第３，４学年…　社会的事象の特色や相互の関連，意味を考え，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断し，考えたことや選択・判断したことを表現する。

○　第５，６学年…　社会的事象の特色や相互の関連，意味を多角的に考え，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断し，考えたことや選択・判断したことを説明したり，それらを基に議論したりする。

5　小学校社会科で育てる思考力・判断力・表現力とは

	何を	どのように	どんな場面で育てるか
思考力	○　社会的事象の意味 ○　社会的事象の特色や相互の関連	○　比較･分類したり総合したり，関連付けたりして	○　学習問題や予想，学習計画を考える場面 ○　調べたことをもとにして社会的事象の意味などを考える場面　など
判断力	○　社会的事象の価値や課題 ○　よりよい社会の在り方，自分たちの社会への関わり方	○　多面的，総合的にとらえて公正に	○　学習したことをもとに，私は何をすればよいか，これから何が大切かなど，自分の考えを決める場面 ○　学習したことの中から自分たちが協力できることを選び出す場面　など
表現力	○　調べたことや考えたこと	○　言語などで ○　根拠や解釈を示しながら図や文章などで	○　ノート，作品などにまとめる場面 ○　話し合う，発表する，提案する場面　など

6　小学校社会科における「見方・考え方」（社会的事象の見方・考え方）とは

○　社会的事象の意味や意義，特色や相互の関連を考察したり，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて構想したりする際の「視点や方法（考え方）」であると考えられる。
（学習指導要領　社会編より）

○　社会的事象やそれを構成する事実を見出すこと（見方）とその事象の意味を解釈すること（考え方）の相互作用によって成り立つものである。

○　比較・関連付け，総合などの思考方法と社会科の内容とを結び付け，社会科における思考力，判断力，表現力の育成を支えるものである。

参考文献：「見方・考え方」社会科編
著者　澤井陽介　加藤寿明　　東洋出版社

Ⅲ　研究の全体構想図

【社会科目標】

社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，グローバル化する国際社会を主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

(1) 地域や我が国の国土の地理的環境，現代社会の仕組みや働き，地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解するとともに，様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。　【知識及び技能】

(2) 社会的事象の特色や相互の関連，意味を多角的に考えたり，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて社会の関わり方を選択・判断したりする力，考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。　【思考力，判断力，表現力等】

(3) 社会的事象について，よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに，多角的な思考や理解を通して，地域社会に対する誇りと愛情，我が国の将来を担う国民としての自覚，世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。　【学びに向かう力，人間性等】

【めざす子どもの姿】

学習や生活の中で，社会に見られる課題をつかみ，知識と技能を活用して主体的に考え，表現しながら課題を解決し，よりよい社会を考え続ける子ども

【研究主題】自ら学び，考え，社会を拓こうとする子どもを育てる社会科学習
～思考力・判断力・表現力を育む授業を通して～

課題解決～よりよい社会へ

将来
日常生活

社会に生きる
社会がわかる
社会を知る

ひろげる
まとめる
調べる
見通す
つかむ

問題解決的な学習

☆　**研究の視点**

◇　単元構成に関して
①　地域の素材「ひと・もの・こと」にふれることができる教材づくり
②　選択・判断の場面を位置付けた単元構成

◇　授業構成に関して
①　「比較・関連・総合」して考え，表現させる学習活動の工夫
②　子どもにかえる評価の工夫

社会に見られる課題

今後の教育の方向，子どもの実態，子ども・教師の思いや願い

Ⅳ　学習指導要領改訂の方向性と研究との関連

何ができるようになるか

☆社会科の目標

→めざす子どもの姿

学習や生活の中で，社会に見られる課題をつかみ，知識と技能を活用して主体的に考え，表現しながら課題を解決し，よりよい社会を考え続ける子ども

→研究主題

自ら学び，考え，社会を拓こうとする子ども

→副題

思考力・判断力・表現力

何ができるようになったか（子どもにかえる評価）

何を学ぶか

☆社会科の学習内容

→社会に見られる課題

地域の素材など

→「社会を知る」「社会がわかる」「社会に生きる」

どのように学ぶか

☆問題解決的な学習

→「つかむ」「見通す」「調べる」「まとめる」「ひろげる」

→地域の素材「ひと・もの・こと」にふれることができる学習活動

→「比較・関連・総合」して考え，表現させる学習活動

→選択・判断の場面がある学習活動

Ⅴ　研究の実際

1　単元構成に関して

(1)　単元構成の工夫

これまで本県小社研では，問題解決的な学習過程を基本としてきた。問題解決的な学習を取り入れるということは，子ども自ら学ぶ意欲を高め，主体的な学習の仕方，つまり，学び方を身に付けることを大切にしているということである。自ら問題を見出し，調べ，考え，判断し，表現して，よりよく問題を解決し公民的資質の基礎を育てていくために，この学習過程は基本となるものである。また，問題を解決する行為は，習得した知識・技能やこれまでの学習・生活経験などを生かしながら展開され，そこでは思考力・判断力・表現力の能力が発揮される。

そこで，問題解決的な学習を核とした授業の中で，「比較して考える・関連付けて考える・総合的に考える」などの思考方法や，言語などで表現する場を意図的・計画的に取り入れながら，「思考力・判断力・表現力を育む」ことをめざしていきたいと考える。

問題解決的な学習の基本的な流れ　　**【□が研究の内容に関わる手立て】**

段階	各段階における学習活動		思考力・判断力・表現力を育む活動	思考力・判断力・表現力を育む手立て
つかむ	○　社会的事象と出合う。 ○　学習問題を設定する。	子どもが社会的事象に出合い，気付いたことや疑問に思ったことなどを集約して，単元を貫く学習問題をつくる段階である。	○　身近な社会生活における観察・調査活動を行う。 ○　写真や統計グラフ等，各種資料における事実の読み取りをする。 ○　学習問題に対する自分なりの予想を既習の知識や経験をもとに考える。	【事前に】 ○　単元全体の教材分析を行い，授業構想を練る。 ○　地域素材や「ひと・もの・こと」との出会いのある教材などの教材開発を行う。
見通す	○　学習問題について予想する。 ○　学習計画を立てる。 ・調べる内容 ・調べる方法	今までの学習経験や生活経験から，学習問題の結論について予想し，解決に向けて学習計画を立てる段階である。 学習計画では，予想したことから「調べる内容」と「調べる方法」について計画を立て，問題の解決に向けて，見通しがもてるようにする。		○　習得した情報を整理し気付いたことを比較させたり，関連付けさせたりして，既得の知識や経験と結び付けさせる。
調べる	○　調査活動や見学をするなど，様々な方法を用いて調べる。 ○　調べて分かったことや考えたことについてまとめる。	学習計画にそって，具体的に追究していく段階である。 調べる内容について，見学や観察をしたり，実際にやってみたり，模倣してみたり，詳しい人に聞いたり，コンピュータで情報収集したりして調べさせる。 調べた事実からそれぞれのもつ事象の意味を考えさせる。 調べて分かったことや考えたことをノートや新聞，紙芝居，ペープサートなどにまとめさせる。	○　問題を解決するための観察・調査活動を行う。 ○　各種資料の読み取りをする。 ○　調べて分かったことや考えたことをノートや新聞などにていねいにまとめる。	○　資料等を比較させたり，関連付けさせたりして，どんなことが分かるのかを考えさせる。 ○　調べて分かったことを比較させたり，関連付けさせたりして，自分なりの方法で表現させる。
まとめる	○　調べて分かったことや考えたことについて話し合う。 ○　学習問題について結論付けを行う。	調べて分かったことや考えたことについて話し合い，社会的事象の意味などについて考える段階である。 考えたことをまとめ，学習問題の結論付けを行わせる。	○　根拠や理由を示しながら，調べて分かったことや考えたことを友達に説明したり，話し合ったりする。 ○　選択・判断したことをもとに，自分の考えをまとめる。	○　自分や友達の考えを比較・関連・総合して考えさせ，まとめさせる。 ○　分かったことをもとにして自分なりの考えをまとめさせたり，話合いの際，選択・判断をさせたりする活動を位置付ける。
ひろげる	○　学んだことを生活に生かす。	単元を通して学んだ社会的事象の意味や学び方など，これまでの学習で獲得したことを，これからの学習や生活へ実践や発信などでつないでいく段階である。	○　既習の学びを生活に生かす観察・調査活動を行う。 ○　選択・判断をするための話合いを行う。	○　単元を通して考えたことをもとに，個人やグループで選択・判断をさせる活動を位置付ける。

社会を拓こうとする子どもの育成

(2) 地域の素材「ひと・もの・こと」にふれることができる教材づくり

社会科は，教材との出合いがその単元の方向性を決めると言っても過言ではない。子どもの身近にある素材を教材化することによって，子どもはその教材に対して，親しみをもって取り組むことができるだけでなく，自分自身や自分の生活とのかかわりで考えたり調べたりすることができる。

子どもの生活や地域を学習の対象としたり，地域の人に学習へ参加してもらったりすることで，自分や自分の生活を見つめたり，自分と地域とのかかわりを考えたりすることができる。そのことは，地域社会の一員としての自覚を育み，やがて社会の形成者としての自覚につながっていくと考える。

また，本県は，「ふるさと教育」を推進しており，郷土の人物や自然，歴史，産業などにふれる機会は充実している。地域の素材である「ひと・もの・こと」は，距離的にも心情的にも身近に感じることができる社会的事象である。人々の思いや願い，自分の生活とのかかわりなどについて考えさせるためにも，地域素材の教材開発に努め，地域素材の教材化のさらなる充実を図っていく必要があると考える。

○ 実践例～第３学年「のこしたいもの，つたえたいもの」

「つかむ・見通す段階」では，『お祭りはどのようにして続けられてきたのだろうか』という問いを立て，宮崎市の生目神社で行われる祭りについて調べることにした。

「調べる・まとめる段階」では，神社へ見学に行き，『祭りが約９６０年前から続いていることやお祭りのときに神楽も舞われていること，県外からもたくさんの人が訪れること，祭りは宮司さんだけでなく地域の人の協力によって続けられていること』などの事実をつかむことができた。そこで『祭りや神楽は，なぜこんなに長く続けられてきたのだろうか』という次の問いへとつなげることができた。子どもたちは，見学で聞いたことや資料から読み取ったことをもとに，『祭りや神楽は，昔の人たちの願いを今に伝えようと，地域の人たちがいろいろな工夫をして続けられてきた』ということに迫っていくことができた。

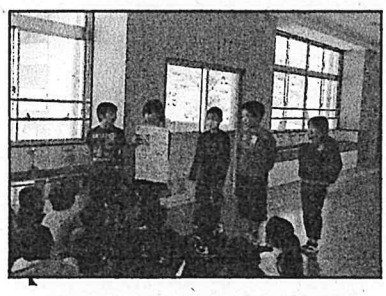
しかし，祭りについて調べていく中で，戦後復活した神楽も伝承が難しくなってきているという課題もみえてきた。子どもたちは，『長い間続いてきたのに，それが途絶えてしまう恐れもある』ということにとても驚いていた。

「ひろげる段階」では，『神楽がこれからも続いていくために，私たちにできることはないだろうか』という問いを立て，自分たちにもできそうなことを考えさせたところ，ポスターを作成することになった。ポスター作成の際は，どんな内容を入れれば地域の人々の思いや願いが伝わるかを話し合わせた。このように，問いの連続性をもたせていくことで，子どもたちは社会的事象の特色や相互の関連について考えを深めていくことができた。

また，ポスター作成後は，家族や他学年に紹介する活動を入れたことで，自分たちも伝統や文化を受け継いでいく一員であるという意識をもたせることにもつながった。

【神社の見学】

【作成したポスター】



【生目神楽について説明する子どもたち】

(3) 選択・判断の場面を位置付けた単元構成

○ 選択・判断の場面を位置付けることの必要性

社会科の目標　　公民としての資質・能力の基礎を育成する

↓

学習指導要領との関連　　よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う

・日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きる

・持続可能な社会の実現を目指す

つまり、世界や未来に目を向けて，社会的事象の意味の確かな理解に基づいて，社会的事象を自分とのかかわりでとらえて，よりよい社会を考えようとする態度や，社会におけるさまざまな問題，課題を解決するための思考力，判断力，表現力を育てていく必要がある。

↓

よりよい社会の形成に参画しようとする意識をもたせる必要性

↓

社会参画意識を育てるために必要な能力

↓

社会への関わり方を選択・判断する力

⇩

社会的事象の仕組みや働きを学んだ上で，習得した知識などの中から自分たちにできることなどを選び出し，自分の意見や考えとして決めるなどして，判断する力のことである。

県小社研では，「単元構成の工夫（問題解決的な学習の基本的な流れ）」で示した，「まとめる」「ひろげる」段階において，調べたことや単元を通して考えたことをもとに，個人やグループで選択・判断をさせる活動を位置付けていく必要性があると考える。この活動を指導計画の終末の段階に設定し，授業を行うことによって，子どもによりよい社会を考えようとする態度や社会のさまざまな問題を解決するための思考力・判断力・表現力を育てていきたいと考える。

「選択・判断の場面を位置付けた学習活動」の例

学年	単　元	本時の目標	学習問題（問い）
3年	市の様子のうつりかわり	宮崎市が抱える課題の中から一つ選び、これからの宮崎市の発展について考えることができる。	もっと暮らしやすい宮崎市にするためには，どんなことを進めたらよいのだろうか。
4年	ごみのしまつと活用	ごみを減らすことと資源や環境を守ることとを関連付けて考えることができる。	ごみを減らすために私たちにできることは，どんなことだろうか。
5年	これからの食料生産	わたしたちの生活を支える食料生産の在り方について考えを深めることができる。	宮崎の食料自給率を上げるために，どんなことに力を入れていけばよいのだろうか。
	自動車工業のさかんな地域	消費者や社会のニーズ，環境などの観点をもとに，自動車購入について自分の考えを深めることができる。	あなたが購入するとしたら，どの自動車を選ぶか。（環境にやさしい，安全性，デザイン性）
6年	天下統一と江戸幕府	信長，秀吉，家康，家光，４人の武将が行った政治をもとに，大きな役割を果たした武将について自分の考えを深めることができる。	武士が支配する社会の仕組みをつくり直すために，一番大きな役割を果たしたのはだれだろう。
	わたしたちの願いを実現する政治	選挙権を行使することと願いを実現することの意味について考えることができる。	宮崎市をよりよくするためにどの代表者を選ぶか。

2　授業構成に関して

(1)　「比較・関連・総合」して考え，表現させる学習活動の工夫

子どもたちは，問題場面に出合ったとき，既有の知識や経験をもとに予想し，調べ，考え，新たな概念を見つけていく。社会に参画する態度を育成するためにも，「自分の考えをもち，それを表現する」ことは重要なことである。 また，問いやそれを調べる計画を明確にしたり，調べる意欲を高めたりするためにも，観察・調査したことや各種の資料を「比較・関連・総合」して考え，表現させる学習活動の充実を図ることが必要となってくる。

考える力を育むためには，まず子どもに思考方法を身に付けさせることが必要となる。どのように考えたらよいかということを具体的に指導していくことで，子どもは社会的事象の見方・考え方を働かせるようになると考える。そのためには，提示した資料から読み取った事実をもとに，「問い」を子どもにもたせることで，子どもは，さまざまな思考を始める。この思考の中でさまざまな考えをもつようになり，子どもは社会的事象の特色や意味などを考えたり，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりすることができるようになると考える。

①　学習活動における「問い」の整理

社会的事象の見方・考え方を働かせた学習においては，子どもにつかませたい基本的な「問い」として，「社会を知る」「社会がわかる」「社会に生きる」ための３つの問いが挙げられる。

また，学習内容について追究する「視点」とされる「位置や空間的な広がりの視点」「時期や時間の経過の視点」「事象や人々の相互関係の視点」を生かした，考察や構想に向かう「問い」を意識して授業づくりを行っていく必要があると考える。

そこで，子どもが社会的事象の特色や相互の関連，意味を多角的に考えるための問いを『考察に向かう「問い」』，また，社会に見られる課題について，社会への関わり方を選択・判断するための問いを『構想に向かう「問い」』ととらえ，以下のように整理した。

考察に向かう「問い」	社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えるための問い	**◇「社会を知る」ための問い** 様子，仕組み，過程，特色など，社会的事象を調べて考えていく活動に向かう問い （どのようになっているか） **◇「社会がわかる」ための問い** 社会的事象の背景を考え，説明する活動へ向かう問い （なぜか，どうしてか）
構想に向かう「問い」	社会に見られる課題について、社会への関わり方を選択・判断するための問い	**◇「社会に生きる」ための問い** 合理的な手段や方法を選択・決定し，社会的な判断へ向かう問い （どうしたらよいか）

② 比較して考える指導のポイント

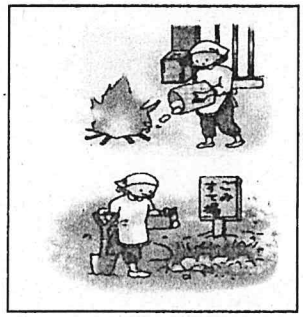
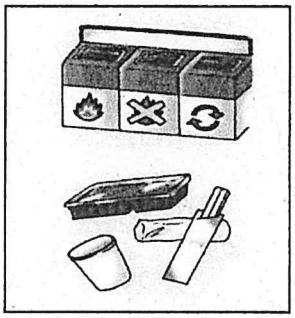
２つ（またはそれ以上）の要素や性質を比べる学習の場を設定する。「比較して考える」学習の場では，情報間の相違点や共通点を洗い出して社会的事象の意味や特色を考えさせる。

○ 社会的事象の違いや共通点を見付け出す。

○ 過去の事象と現在の事実を比べてみる。

○ 実践例～第４学年「ごみのしまつと活用」

〈学習のめあて〉 ごみの処理の仕方について調べよう。

８０年くらい前	４０年くらい前	今
		
・ごみ捨て場に穴を掘ってうめたり，燃やしたりしていた。 ・腐ったにおいがして，不衛生などの問題があった。	・市が収集車でごみを集めて処理するようになった。 ・プラスチックのトレイやビニールの買い物袋が用意されて，便利になった。 ・ごみの量がどんどん増えてきた。	・ごみを分別して出すようになった。 ・資源物はリサイクルに回して，ごみを減らすようになった。 ・生活がさらに便利になり，使い捨ての物が増えた。

【「社会を知る」ための問い】 ごみの処理の仕方にはどんな違いがあるでしょうか。

（比　較）

【「社会がわかる」ための問い】 なぜごみの処理の仕方は変わったのでしょうか。

・ ごみ捨て場にうめたり，燃やしたりしていたけど，市が集めて処理するようになった。
・ ごみを分別するようになった。　・ 資源物をリサイクルに回すようになった。

子どもが，それぞれの時代のごみの処理の仕方について調べた上で，発問①「社会を知る」ための問いをもたせることが大切である。そうすることで，子どもは３つの資料を比較しながら，ごみの処理の仕方の変化について気付くことができるのではないかと考える。

そして，「なぜごみの処理の仕方は変わったのでしょうか」と発問②「社会がわかる」ための問いをもたせることが有効な手段と考える。

以上のように，比較して考える際には，「社会を知る」→「社会がわかる」の問いが主になされていくのではないかと考える。そのために，資料を複数用意しておくことと，比較しやすいものの提示をすることが求められる。その資料にあった発問を行うことで，子どもは「比較して」考える力が育成されていくと考える。

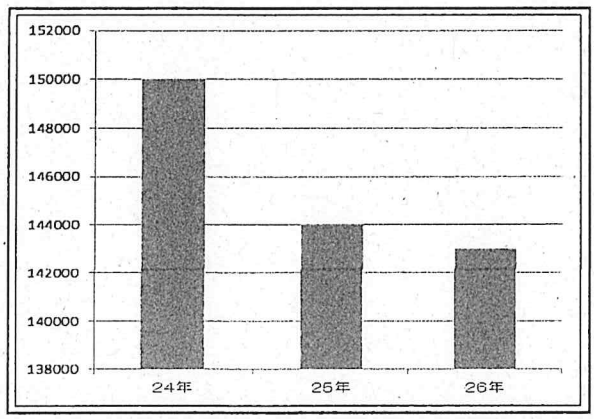
③　関連付けて考える指導のポイント

教師が複数の事実や資料を提示し，それぞれから読み取れること，全体から分かることや言えることを問う。そうすることで，ずれや重なり，矛盾などがあらわれ，考えたい問題が生み出されやすくなる。

○　事象を他の事象と結び付ける。

○　事象をこれまでの体験と結び付ける。

○　実践例～第４学年「ごみのしまつと活用」



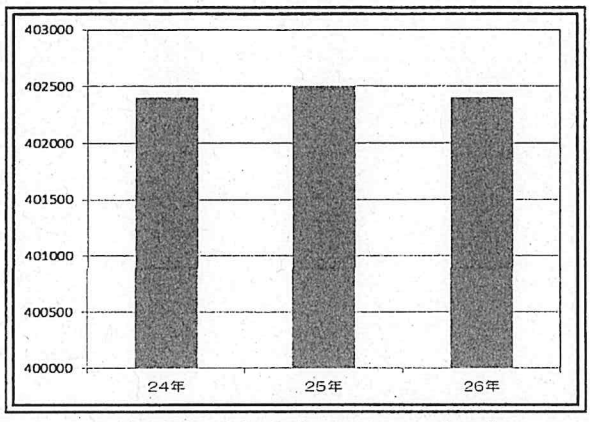
資料１【宮崎市のごみの量の変化】

【「社会を知る」ための問い】

資料１のグラフから，どのようなことが分かるでしょうか。

・　平成24年は，ごみの量が15万トンだ。

・　平成25年，26年と，ごみの量が減ってきている。



資料２【宮崎市の人口の変化】

【「社会を知る」ための問い】

資料２のグラフから，どのようなことが分かるでしょうか。

・　平成24年から26年まで，宮崎市の人口はあまり変わっていない。

（関　連）

【「社会を知る」ための問い】　２つの資料を見て疑問に思うことはどんなことですか。

【「社会がわかる」ための問い】

《学習問題》　宮崎市の人口はあまり変わらないのに，どうしてごみの量は減ってきているのだろうか。

以上のように，関連付けさせて考える際にも，「社会を知る」→「社会がわかる」ための問いが主になされていくのではないかと考える。そのための資料は，一見すると関係のないもののようであるが，事実と事実を結びつけていくと，社会が見えてくるような資料が求められる。その資料にあった発問を行うことで，子どもに「関連させて」考える力が育成されていくと考える。

④　総合的に考える指導のポイント

複数の資料から調べた情報と既有の知識や経験，友達との意見とを結び付けると何が言えるのかを考えさせる。

○　具体的なことを一般化・抽象化する。

○　一般的・抽象的なことを具体的な事実に当てはめる。

○　実践例～第４学年「ごみのしまつと活用」

【「社会を知る」ための問い】　ごみは，どのように処理されているのでしょうか。

○　ごみのゆくえ	○　ごみが生まれ変わる ～資源物の処理	○　ごみをへらす取り組み
・　燃やせるごみ（焼却炉で燃やす） ・　燃やせないごみや粗大ごみ（燃やせるごみと資源物に分けて処理する） ・　最終処分場での工夫（水処理施設，熱利用など）	・　ペットボトル→プラスチック製品などの原料など ・　空き缶→アルミ原料や建設用の材料など ・　紙パック→トイレットペーパーなど	・　工場内の資源物集積センターに集められ，原料や燃料として再利用する。 ・　地域でフリーマーケットを行っている。 ・　５Ｒごみ減量活動を進めている。

自分や友達が調べて分かったこと

既　習　事　項　　生活経験・知識

（総　合）

【「社会がわかる」ための問い】
調べたことや友達の発表を聞いてどんなことがわかりましたか。

・　ごみをしっかりと分別して出すことが大切である。
・　資源物の再利用が，ごみを減らすことにつながる。
・　ごみ処理施設で働く人は，地域の人々の健康な生活や身の回りの環境を守る役割を果たしている。

以上のように，総合して考える際には，「社会がわかる」ための問いが主になされていくと考える。また，単元の「まとめる」段階にも用いられる問いであると考える。単元を構成する際に，子どもに身に付けさせたい考え方は何であるのかを整理することで，どのように問えばよいのかが見えてくるのではないかと考える。

さらに単元の「ひろげる」段階において，社会に見られる課題の解決に向けての関わり方を構想させるためには，以下のような「社会に生きる」ための問いが主になされていくと考える。総合して考えたことをもとに，地域の人々や国民の生活と関連付けて考えさせることが大切であると考える。

【「社会に生きる」ための問い】
ごみを減らすために，自分たちにできることを考え，提案しよう。

・　わたしは，ごみ処理施設で働く人のことを考えて，ごみをきちんと分別していくことをポスターにするわ。
・　ぼくは，決められた日に資源物が出せるように，ごみカレンダーを作って掲示するよ。

⑤ 表現する指導のポイント

観察・調査したり，各種の資料から必要な情報を集めて読み取ったりしたことを的確に記録し，「比較・関連・総合」して考えたことを自分の言葉でまとめ，友達と伝え合うようにさせる。

○ 調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。

・ 第３学年，第４学年… 調べたことや社会的事象の特色や相互の関連，意味について考えたことを，相手にも分かるように表現できるようにすることが大切である。

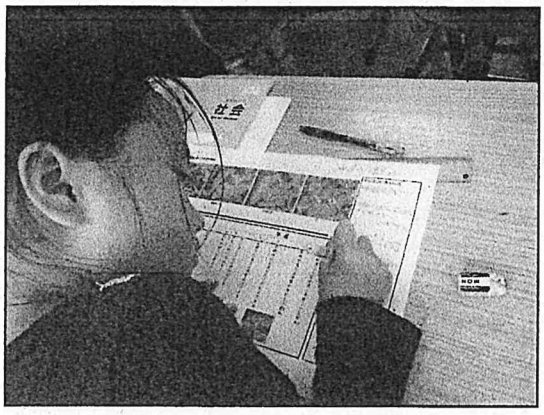
・ 第５学年，第６学年… 調べたことや社会的事象の特色や相互の関連，意味を多角的に考えたことを，根拠や解釈を示しながら，図や文章などで表現し説明できるようにすることが大切である。

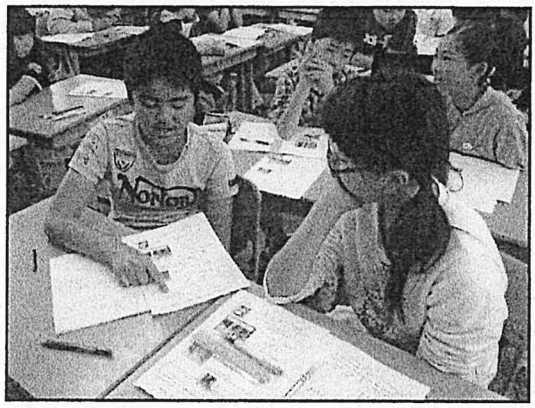
○ 観察や調査・見学などの体験的な活動を指導計画に適切に位置付けて，調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにすることが重要である。

○ 調べたことをもとにして考える。
- **「わかったこと」を，ていねいにまとめさせること**
- **考える時間（話合い・ノート記入など）を保障すること**
- **学習問題をふり返ること**
  「なぜかというと～」 「つまり，○○な～」

○ 相手に分かるような説明をする。
- **「根拠（資料など）や理由を示して」**
- **「具体例を挙げたり，まとめたりして」**
- **「他者の意見と関連付けるなど，自分の立場を明確にして」**
- **「一度解釈して自分の言葉で」**

○ 伝え合うことでお互いの考えを深める。
- **聞き合い，受け止め合える子どもを育てること**
- **話し合う目的を示すこと**





(2) 子どもにかえる評価の工夫

① 評価の観点の整理

社会科の目標に準拠した評価をさらに進めていくため，資質・能力の３つの柱に基づいた目標や内容の再整理を踏まえて，観点別学習状況の評価の観点については，小・中・高等学校を通じて，「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の３観点に整理された。

その際，「学びに向かう力・人間性等」は，観点別学習状況の評価になじまないことから，評価の観点としては学校教育法に示された「主体的に学習に取り組む態度」として設定し，感性や思いやりなどについては観点別学習状況の評価の対象外とされている。

観点	評価の内容	評価の工夫（例）
「知識・技能」	・　個別の知識及び技能の習得状況について評価する。 ・　それらを既有の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で，概念等として理解したり，技能を習得したりしているかについて評価する。	・　ペーパーテストにおいて，事実的な知識の習得を問う問題と，知識の概念的な理解を問う問題とのバランスに配慮する。 ・　実際に知識や技能を用いる場面を設ける。（子どもに文章で説明をさせたり，図や絵などで表現させたりする。）
「思考・判断・表現」	・　知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力を身に付けているかどうかを評価する。	・　ノートやワークシートへの記述（事実に対する自分の考えなど）やレポートの作成，発表，グループでの話合い，作品の制作や表現等の多様な活動を取り入れる。 ・　ポートフォリオを活用する。
「主体的に学習に取り組む態度」	・　知識及び技能を獲得したり，思考力，判断力，表現力を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組の中で，自らの学習を調整しようとしているかどうかを含めて評価する。	・　ノートやワークシート，レポート等における記述 ・　授業中の発言 ・　教師による行動観察 ・　子どもによる自己評価や相互評価等の状況を教師が評価を行う際に考慮する材料の一つとして用いる。

② 評価の生かし方

評価の基本は，児童の学習状況を把握するとともに，その結果を指導に生かすことである。

本研究では，1単位時間ごとに指導のねらいを踏まえて評価の観点を絞り，評価計画を作成し，子どもの学習状況を的確に把握するとともに，その結果を次の指導に生かすことを重視している。

そこで，学習評価を「本時の目標を達成するための評価」，「単元の定着をみるための評価」の２つの視点から考え，単元の指導計画に位置付けていくことにした。

○　本時の目標を達成するための評価

評価を行う際は，得られた評価を即座に次の指導に役立てるようにしていくことが重要である。評価と同時進行で一人一人にきめ細かく指導していくために，１単位時間において，評価規準に到達しているかを把握し，

- 発問を工夫する。
- 状況に応じて新たな資料を提供する。
- 子どもに寄り添って資料を一緒に読み取る。

など，その場の指導に評価を生かす手立てを準備しておくことが大切である。

【本時の目標を達成するための評価】

発問・指示
↓
子どもの学習活動
↓
評　価
（机間指導，挙手など）
↓
全体指導・個別指導

○　単元目標の定着をみるための評価

３つの観点に沿って１単位時間ごとに評価結果を記録し，それを総括することが必要である。

その際の留意点としては，

- 理解の深まりを確認し，定着していない状況が見られる場合には，個別の指導や補充の指導を行う。
- 指導方法の改善（授業の流れやワークシート，発問，資料の改善など）を図る。

などの手立てを行うことが大切である。

【単元目標の定着をみるための評価】

発問・指示
↓
子どもの学習活動
↓
評　価
（提出物・観察）
↓
事後の評価資料として活用

③　評価の実際

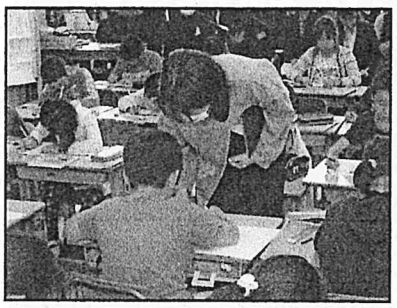
子どもの学習の様子を多面的にとらえ指導に生かしていくために，学習活動と一体化した評価方法について工夫する必要がある。そして，そのような方法で把握した，その子どもなりの考え方やものの見方，表現の仕方などが学習の中で発揮できるように支援したり，みんなで吟味したりして，そのよさを認め合ったりすることを通して，一人一人の自己実現を図るようにしていくことが大切である。具体的な評価の方法は次に示すとおりである。

○　行動観察

行動観察は，子どもの学習状況を見る上で有効な評価方法である。

特に「主体的に学習に取り組む態度」を評価するためには欠くことのできないものである。またチェックリストや座席表を工夫して作成することにより，「知識・技能」「思考・判断・表現」も評価することができる。

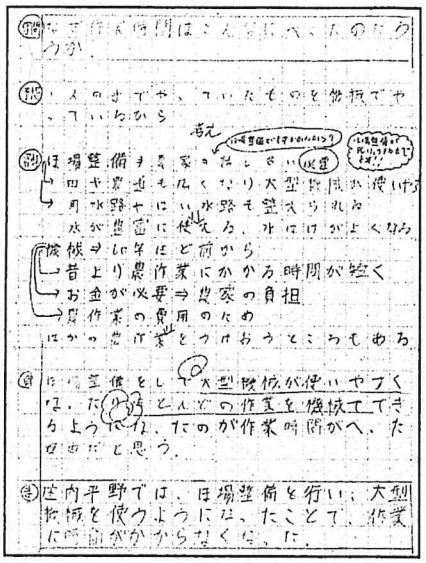
具体的な評価場面としては，「授業中の発言状況」「見学や調査活動時の子どもの様子」「調べ活動中の子どもの追究過程や表現活動」「まとめの段階での発表や聞く態度」などを評価することができる。



○　学習ノートの分析

学習ノートから子ども一人一人の「知識・技能」「思考・判断・表現」を評価していくことができる。ただし，学習ノートを活用した評価を行うためには，まず，確かな評価ができるノート作りの指導を行う必要がある。学習ノートを活用する際に大切にしたいことは，板書されたものを書き写すばかりでなく，「資料をどう読み取ったか」「そこからどんな疑問をもったか」「学習問題を解決するためにどのように調べ，どう考えたか」が記されるようにしていくことである。

つまり，「事実だけでなく，そこにかくれている人々の思いや願い」をまとめていくように指導していくことが大切である。また，子どもが主体的に調べた過程をまとめたり，自分の学習をふり返ったりできるものでなければならない。



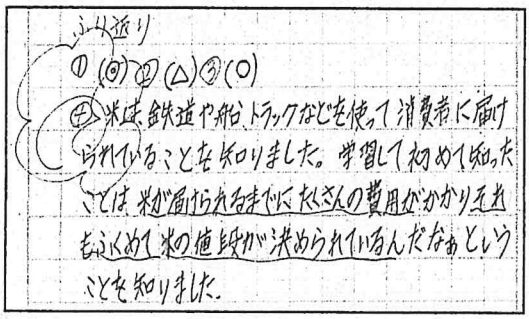
○　ワークシートの分析

ワークシートは，子どもの学習活動で活用されると同時に教師にとって重要な評価資料となる。評価計画や教材分析図などをもとに，その時間に評価したい観点を明確にして作成していくことにより，観点に沿った評価をスムーズに行うことができる。そのため，作成する際は，「単元の目標や評価規準に照らして単元全体を見通していくこと」が大切である。

○　自己評価

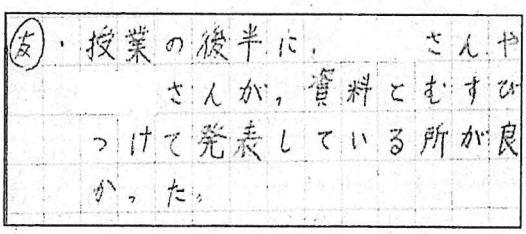
自己評価は，子ども自身が自らの学習過程をふり返り，学びの手応えを味わい，新たな意欲，目標や問題をもって学習を進めていくために行うものである。また，教師にとっては行動観察だけではとらえにくい子どもの内面を探り，追究の意欲，充実感や成就感，自己を見つめる態度，学んだことを生かそうとする態度など評価する手がかりを得ることができ，指導の工夫を図れるものである。

自己評価を進める際には，態度面だけの評価を行うのではなく，理解面の深まりを評価するために，「今日学んだこと，考えたことを具体的に自分の言葉でまとめさせる」ようにする。それを評価することで，子ども自身が自分の問題をとらえられるようにしたり，教師が授業の構成を見直す材料にしたりできるようにすることも大切である。



○　相互評価

相互評価は，自己評価をより確かなものにするという役割をもっている。また，自分だけでは気付きにくい面を子ども同士で話し合いアドバイスしていくことを通して，考えを広げたり深めたりするために行うものである。そこでは，「共に学んでいけるという実感や自分とは異なる見方や考え方を受容し，学びの幅を広げていくという共に学ぶ態度」が養われる。



【学年部別研修会資料】

（1） 学年部別研修会(9:30～11:35)

① 研究発表①(9:30～10:15)

部会	研究発表者	司会者	指導助言者	会場
4年	宮崎市立清武小学校 指導教諭　三角友香	宮崎大学教育学部附属小学校 教諭　神田佳奈	県教育庁義務教育課 指導主事　田中義栄	ブレイク アウト ルーム①
5年	新富町立上新田小学校 教諭　中原英之	高鍋町立高鍋西小学校 教諭　吉田美紀	中部教育事務所 指導主事　馬原祐介	ブレイク アウト ルーム②
6年	都城市立祝吉小学校 教諭　大﨑美穂	宮崎市立江南小学校 教諭　別府貴裕	県教育研修センター 指導主事　久野智章	ブレイク アウト ルーム③

② 研究発表②(10:25～11:10)

部会	研究発表者	司会者	指導助言者	会場
4年	講義・演習「副読本の活用について」	県教育庁義務教育課 宮崎市立生目台西小学校	指導主事　田中義栄 指導教諭　郡司美和子	ブレイク アウト ルーム①
5年	延岡市立東小学校 教諭　那須真衣子	宮崎大学教育学部附属小学校 教諭　上園真輝	中部教育事務所 指導主事　馬原祐介	ブレイク アウト ルーム②
6年	椎葉村立椎葉小学校 教諭　山田愛	宮崎市立本郷小学校 教諭　平野雄大	県教育研修センター 指導主事　久野智章	ブレイク アウト ルーム③

③ 県理事による実践紹介(11:20～11:35)

4年	単元名「郷土の偉人」 宮崎市立加納小学校　指導教諭　尾﨑智子	ブレイク アウト ルーム①
5年	単元名「自然災害から人々を守る」 宮崎市立清武小学校　指導教諭　三角友香	ブレイク アウト ルーム②
6年	単元名「明治の新しい国づくり～国力の充実をめざす日本と国際社会」 宮崎市立江南小学校　教諭　別府貴裕	ブレイク アウト ルーム③

第４学年

自ら学び、考え、社会を拓こうとする子どもを育てる社会科学習
～思考力・判断力・表現力を育む授業を通して～

単元名　地域の発展につくした人々（水田に広がる用水路～松井用水路～）

宮崎市立清武小学校　　指導教諭　　三角　友香

1　研究主題とのかかわり

新型コロナウイルス感染拡大により、情報化はさらに加速し、学校を含む社会のいたるところでＩＣＴの活用が日常のもとのとなった。さらに、ウクライナ情勢をはじめとし、国際社会の進展や価値観の多様性など、人々の生活環境はめまぐるしく急速に変化している。こうした社会の中で、次世代を切り拓く子ども一人一人が、個人と社会の成長につながる新たな価値を生みだしていくことのできる“持続可能な社会の形成者”として、成長していくことが期待されている。

また、宮崎県の実態として、各種調査等から「複数の資料を関連付けて読み取ること」「学習問題の解決に必要な情報を選択し、その情報を関連付けたり総合したりして説明すること」に課題があることが分かった。これらの結果や現状から、問題解決的な学習を核とした単元構成や評価の工夫を取り入れるとともに、思考力・判断力・表現力を育む具体的な授業の在り方について研究を進め、指導方法の工夫・改善を図ることにより、「自ら学び、考え、社会を拓こうとする子ども」を育てたいと考え、本主題及び副題を設定した。

2　研究の視点

(1)　単元構成の工夫

身近にある素材を取り上げることで、児童は意欲的に学習に取り組むことができる。さらに自分自身や自分の生活とのかかわりで考えたり調べたりするためにも、地域の素材「ひと・もの・こと」にふれることができる教材づくりが必要である。また、「問い」を整理し、単元構成図を作成する。単元構成図を作成することで、「どの場面で」「どのように」地域の素材を取り上げるのか可視化し、身に付けさせたい資質や能力が明確にしていく必要があると考えた。

(2)「比較・関連・総合」して考え、表現させる学習活動の工夫

提示した資料から読み取った事実をもとに「問い」を児童にもたせる必要がある。この思考の中でさまざまな考えをもつようになり、子どもは社会的事象の特色や意味などを考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりすることができるようになると考える。そこで、「比較・関連・総合」して考え、表現させる学習指導の充実を図ることが必要である。

考察に向かう「問い」	社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えるための問い	◇「社会を知る」ための問い 様子，仕組み，過程，特色など，社会的事象を調べて考えていく活動に向かう問い （どのようになっているか） ◇「社会がわかる」ための問い 社会的事象の背景を考え，説明する活動へ向かう問い （なぜか，どうしてか）
構想に向かう「問い」	社会に見られる課題について、社会への関わり方を選択・判断するための問い	◇「社会に生きる」ための問い 合理的な手段や方法を選択・決定し，社会的な判断へ向かう問い （どうしたらよいか）

【資料１　「問い」の分類】

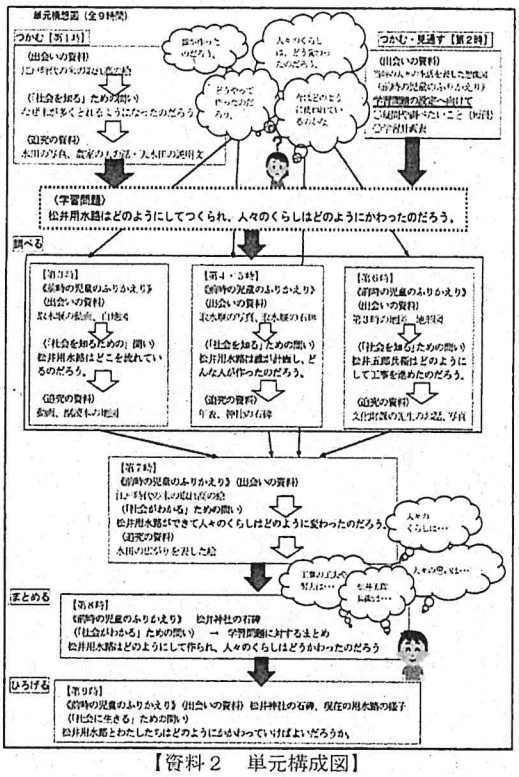
(3)　子どもにかえる評価の工夫

宮崎県小学校社会科研究会では、1単位時間ごとの指導のねらいを踏まえて、評価の観点を絞り、評価計画を作成することを重視している。その中で、児童の学習状況を的確に把握するとともに、その結果を次の指導に生かすことが重要であると考えている。そこで、学習評価を「本時の目標を達成するための評価」「単元の学習内容の定着をみるための評価」の２つの視点から考え、単元の指導計画に位置付けていくことにした。また、単元の指導計画に位置付けた評価計画は、児童の様子や学習状況に応じて、適宜、より良いものにしていくなど、柔軟性をもって取り組むこととした。

3　研究の実際

(1) 単元構成の工夫

本校の校区内を流れる清武川から取水し、地域の水田を潤している松井用水路を教材として取り上げることにした。普段自分たちが、何気なく見ている場所が、人々の生活にとって欠かせないものであり、今も、私たちのくらしを支えていることにつながる教材であるといえる。こうしたことを踏まえて、単元構成図を作成することは、「問い」を整理し、教材の取り上げ方や評価につながる資質や能力を可視化することにつながる。



【資料２　単元構成図】

(2) 「比較・関連・総合」して考え、表現させる活動の工夫

① 考え、表現する力を支える指導

考えたり、表現したりするために、資料を読み取る力も大切となる。そこで、教科書や副読本では、キーワードとなる言葉や文章と写真などの資料を結び付けたり、線を引いたりしながら調べるよう指導を行った。また、昼休み後の「三計タイム」（昼の１５分間の学習）を利用し、写真やグラフを読み取る学習、クラゲチャートやＹチャートなどの思考ツールの使い、考えをまとめる学習を反復して行った。

② ＩＣＴの活用

ＩＣＴは、必要な場面で「手段」として使用することが重要であり、使用することが「目的」になってはならない。ＩＣＴの有効性は、①視覚化②共有化③焦点化が挙げられる。本研究では、自分の考えを図や文章に表したり、友達の考えと比較して相違点を見つけながら考えを深めたりする際に利用した。また、発表する際に資料を拡大して提示したり、紙媒体で作成した地図を写真に読み込んだ上に関連する写真を選んで添付したりするなど、紙媒体だけでは難しい、または、時間がかかる場面で活用することで、思考力・判断力・表現力の育成を図った。

(3) 子どもにかえる評価の工夫

ＩＣＴのアプリケーションを利用し、学習に関する事後アンケートを毎時間作成した。この自己評価は、すぐさまグラフ化され、児童の氏名も分かるようになっている。この機能を利用し、評価の低かった児童への個別指導を行ったり、復習を行ったりした。また、ふりかえりシート、ノートやワークシートなどの紙媒体での評価も平行して行うことで、本時の目標を達成するための評価」「単元の定着をみるための評価」の２つの視点で評価を行った。

4　研究の成果と今後の課題（○：成果、●課題）

○　実際に休みの日に、用水路の見学に出かけたり、農業をしている方に話を聞きに行ったりするなど、学習意欲が高まり、意欲的に学習に取り組むことができた。

○　コロナ禍のため、グループ活動ができない中でも、自他の考えを比較して自分の考えを加筆修正したりすることができた。調べ方を理解し、関連付けて考えたり、まとめて表現したりすることができるようになってきた。

●　ＩＣＴの効果的な活用方法や評価内容など、さらに研究を進めていく必要がある。

第５学年　研究発表

【研究テーマ】

自ら学び、考え、社会を切り拓こうとする子どもを育てる社会科学習

～資料活用や課題解決活動の工夫を通して～

宮崎県　新富町立上新田小学校　教諭　中原　英之

1　研究主題とのかかわり

学習指導要領の社会科の目標には、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成することを目指す。」と示されている。

そこで本研究では、変化の激しい時代にあっても自ら学び、考え、社会を切り拓こうとする児童の育成を目指し、問題解決的な学習を基本とした授業の中で、児童自身の課題意識を明確にし、資料を適切に活用しながら思考力・判断力・表現力を育むための工夫を取り入れることを通して、「社会をみつめる力」、「社会を考える力」、「自分と社会をつなげる力」の育成を図ることとした。

2　研究の視点

(1)　学習課題の解決につながる提示資料の精選や発問の整理

・　効果的な資料の精選と提示

・　提示資料を生かす発問の整理

(2)　課題解決に向けた思考・判断・表現活動の工夫

・　調べ活動の工夫と話合い活動の設定

・　自らの考えをまとめ、表現するための工夫

3　研究の実際

(1)　単元名

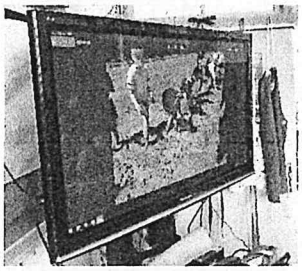
「わたしたちの食生活を支える食料生産」

(2)　実践の概要

○　学習課題の解決につながる提示資料の精選や発問の整理

・　効果的な資料の精選と提示

学習への興味・関心を高め、学習内容と日常生活を関連付ける意識を高めるために、導入の段階で総合的な学習の時間で行った田植えの写真や給食の献立表など、体験したことや身近にあるものと学習内容とを関連付けられるよう精選して提示した。



【田植え時の写真提示】

・　提示資料を生かす発問の整理

調べる段階で資料を提示する際には、「どのように」（調べ・考える問い）、「なぜ・どうして」（考え・説明する問い）、「どうしたら」（判断する問い）というように児童への問いを整理し、目的をもって調べ活動や話合い活動へ取り組ませた。

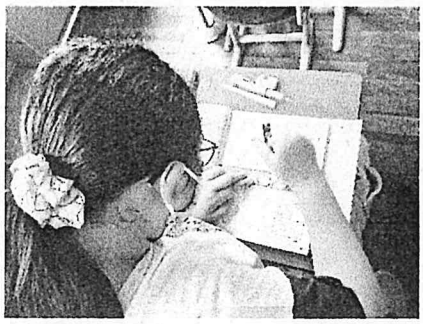
考察に向かう「問い」	構想に向かう「問い」
社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えるための問い	社会に見られる課題について、社会への関わり方を選択・判断するための問い
◇「社会を知る」ための問い 「どのように」「どんな」 ◇「社会がわかる」ための問い 「なぜ」「どうして」	◇「社会に生きる」ための問い 「どうしたら」

宮崎県小学校教育研究会社会科部会作成

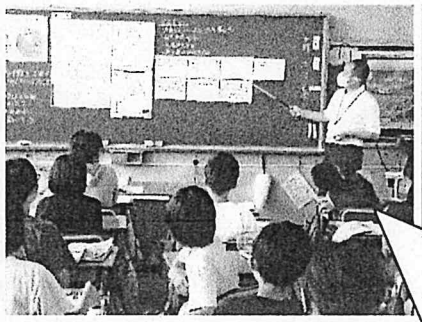
○　課題解決に向けた思考・判断・表現活動の工夫

・　調べ活動の工夫と話合い活動の設定

ノートに分かったことを記述することが苦手な児童でも調べ活動に取り組めるよう、教科書へのマーキングに取り組ませた。記述に下線を引いたり、課題解決に関係する部分を囲んだりすることで、自分の気付きを残すことができるようになった。また、課題解決に向けた話合い活動では、一人一人が意見を出す時間を確保できるよう３～４人の少人数グループにするとともに、ホワイトボードを活用して学習問題に対する考えを全体で共有・整理した。



【マーキングの様子】

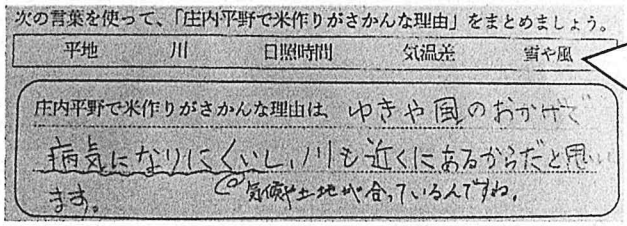


【ホワイトボードでの共有】

①読み取って分かったことを整理。
②話合い結果をボードへ記入。
③全体で共通点を探り、キーワードを整理。
※まとめにつながるよう意図的に整理。

・　自らの考えをまとめ、表現するための工夫

宮崎県の学習状況調査の結果から、分かったことをもとに自分の考えを表現する力に課題があることが明らかになったため、下記のようにキーワードが記載されたワークシートを用いて自分の言葉でまとめる活動へ取り組ませた。


次の言葉を使って、「庄内平野で米作りがさかんな理由」をまとめましょう。

平地	川	日照時間	気温差	雪や風

庄内平野で米作りがさかんな理由は、ゆきや風のおかげで病気になりにくいし、川も近くにあるからだと思います。
気候や土地が合っているんですね。

【児童のワークシート】

ワークシートはノートに貼り、学習のまとめにつなげた。授業終了後にノートを回収し、内容や表記に関する補充指導を行い、評価にもつなげた。

4　研究の成果と課題

(1)　学習課題の解決につながる提示資料の精選や発問の整理に関して

○　田植えの写真など学習内容と体験がつながるよう資料の精選を図ったことで、導入から学習問題を立てるまでの流れの中で児童の思考の流れが途切れず、意欲的に課題設定ができた。

○　発問を整理したことで、指導者側が本時の学習で「何を・どのように」考えさせたり活動させたりすればよいか整理できた。また、活動に応じた資料の準備にもつながった。

●　調べたことから考えたり、自分の考えをさらに深めたりする際の発問についても整理しておく必要がある。

(2)　課題解決に向けた思考・判断・表現活動の工夫に関して

○　調べ活動においてマーキングに取り組ませたことで、書くことが苦手な児童も進んで調べ活動に参加する姿が見られた。また、少人数で意見をまとめる活動を取り入れたことで、互いに気付いたことを意見交換し合う姿が多く見られるようになった。

●　ワークシートに考えをまとめる際に、キーワードが多すぎて文章化しづらい児童が見られた。キーワードを絞って提示したり、上手にまとめている児童の文章を例示したりすることで自分の考えを表現する力の育成につなげていきたい。

子どもの思考力・判断力・表現力を育む指導の実際

延岡市立　東小学校　那須　真衣子

1　はじめに

昨年度受けもった学級の児童は、集中して授業に取り組み、粘り強く問題を解くことができた。その一方で、自分の考えに自信がもてず、予想や気付きを友達に伝えたり、誰かが正解を言ってくれるのでは、と授業に受け身な姿勢が見られたりした。また、社会科の学習に対して、「覚えることが多い」など面白くないと感じている児童が多かった。そのことから社会科の授業では、全体的に消極的で、発言や自己表現が少ないという傾向があった。

2　実践内容

(1)　**思考力・判断力を高めるための手立て**	(2)　**表現力を伸ばすための手立て**
①　疑問・気付きを引き出す資料の工夫	①　まとめのキーワードを整理するための工夫
②　思考を深めるためのノートの活用	②　学んだことを自らの言葉でまとめやすくするための手立て

3　具体的な実践

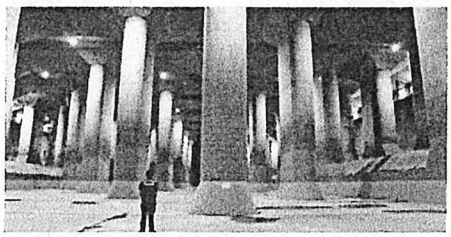
(1)　思考力・判断力を高めるための手立て

①　疑問・気付きを引き出す資料提示の工夫

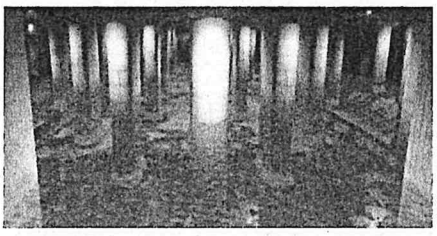
生活に直結するものを写真で提示し、児童が興味をもって取り組むことができるようにしたり、学習の中でイメージしにくいものを写真を用いて、イメージしやすくしたりした。「わたしたちの生活と環境」での実践（令和３年２月）

＜椎葉村の豪雨での土砂災害の様子＞

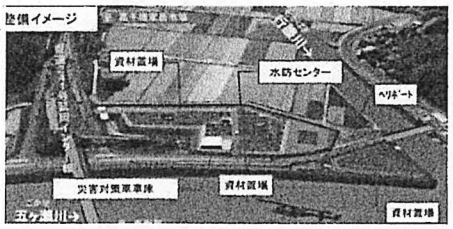
９月の台風が原因で起こったことから、台風の時期に風水害が起こりやすいということと、本時のねらいである「被害を減らすための取組」へつなげるように写真を提示した。



＜放水路の水がたまった様子＞

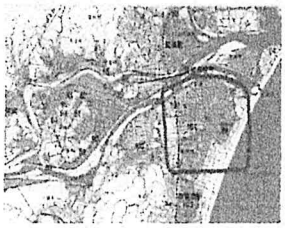


大きさや広さ、水がたまった後の様子をイメージしやすいようにした。



＜延岡市の防災ステーション＞

＜五ヶ瀬川の近くの「天下地区河川防災ステーション」＞
平成１７年９月に五ヶ瀬川で洪水が起きたことから、コンクリートブロックなどの資材の備蓄や、ヘリポート等の整備、水防センター等が設置されている。



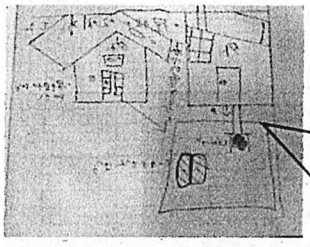
＜延岡市のハザードマップ＞

延岡市ハザードマップの、レベルによる色分けを見て、自分たちの地域はどれくらいのレベルなのか、どのくらい浸水してくるのかを確認することができていた。

この学習では、梅雨や台風の時期に土砂災害が起きやすいということと、宮崎県は海に近く、自然災害が起きやすい地域ということから、様々な取り組みがされていることを理解するということを本時のねらいとした。延岡市の取組が多くあるということから、被害を受けやすい地域だからではないか、と考えを深めている児童も見られた。

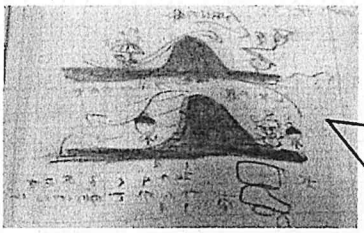
② 思考を深めるためのノートの活用

予想や気付きをノートに書く時間を十分にとり、後のグループでの話合いではノートを見せながら説明させた。また、文章にすることが難しい児童の中に、絵を描いて予想したり確認したりしている児童がいたため、その方法でもよいということを伝えた。



雪が積もらないよう、屋根が傾いている様子を表現している。

<北海道の家の仕組の説明>



風の流れ（季節風）を矢印で表し、それによって気候がどう変わるのかを表している。

<日本海側と太平洋側の気候の変化の説明>

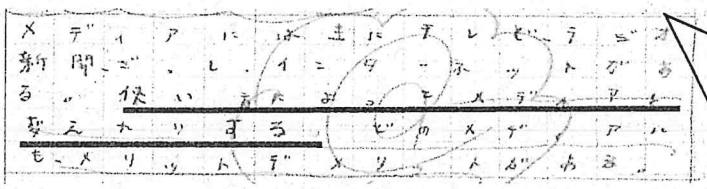
(2) 表現力を伸ばすための手立て

① 学んだことを自らの言葉でまとめやすくするための手立て

教師が考えたまとめをそのままノートに写すのではなく、授業で学んだこと、気付いたこと、分かったことを自らの言葉で表現し、まとめさせるようにした。初めは、どう書けばいいのか戸惑っている児童が多かったが、回数を重ねるにつれ短時間で表現できるようになってきた。 「情報産業とわたしたちのくらし」での実践（令和３年１月）

㋐

㋑



左は、「情報産業とわたしたちのくらし」の１時間目の授業のノートである。

㋐ではメディアのメリット、㋑では使い方によってメディアを変えることが大切である、とそれぞれ書かれてある。この授業ではメディアのメリットとデメリットを学習したので、㋑の児童はそれに付け加えて、自分の考えを書くことができている。

② まとめのキーワードを整理するための工夫

まとめの時間に自分の言葉で表現することが難しく、要約できないためにまとめきれず、文章量が多くなる児童がいたため、ロイロノートを使って「まとめ」の仕方を工夫した。

まとめ

- 森林の占める割合
- 森林の広がり
- 森林にはどのような働きがあるか

まとめ

森林は、日本の国土面積の（　　）を占めている。（　　）に広がっており、（　　）を保つなどの働きがあった。

<まとめの中にいれるキーワードや視点を与える>

なかなか自分の言葉でまとめが書けない児童への支援として、キーワードの部分を（　）にし、そこを埋めるような手立てをとった。そうすることで、授業で習った内容や語句を確かめることができた。

4 成果と課題 （○：成果 ●：課題）

○ 生活に直結し、児童が興味関心をもてるような資料を工夫することで、児童が自分事として課題を捉え、思考力・判断力を必要とする学習活動を展開することができた。

○ 交流のツールとしてノートを活用したり、言葉だけでなく絵図を関連付けながら書く方法を紹介したりしたことで、学習したことを自分なりの表現方法で伝え合う児童の姿が見られるようになった。

● 自力のみでの表現が難しい児童に対して、さらなる指導の工夫や個別の支援が必要である。

5 おわりに

これらの実践を通して、授業中予想や気付きをノートに書いたり発表したりする児童が増え、学級全体の学習が深まった。また、年度末には「社会が楽しかったです」などの社会科学習に対する肯定的な意見を聞くことができるようになった。今後は課題も踏まえ、予想や気付きだけでなく疑問等が出ると、さらに「知りたい」という気持ちが強くなるのではないかと考える。そこから自分の意見をふくらませるような手立てを考えていきたい。

研究主題

第６学年

「自ら学び、考え、社会を拓こうとする子どもを育てる社会科学習」

～思考力・判断力・表現力を育む授業を通して～

都城市立祝吉小学校　大﨑　美穂

Ⅰ　主題設定の理由

中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」には、授業改善の視点となる「主体的・対話的で深い学び」について、その趣旨と活動の方向性が示されている。「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善の目的は、子どもに「資質・能力」を育成し、確かな学力を身に付けさせることとある。学習指導要領には、社会科において育成すべき３つの「資質・能力」として、①「知識及び技能」②「思考力、判断力、表現力」③「学びに向かう人間性」を掲げている。本研究の副題にもあるように、「思考力、判断力、表現力」を育む授業とは、「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。」授業であると言える。しかし、実際の社会科の授業においては、教師が一方的に知識を教える指導だけになり、多角的に考える場面を生み出すことや、考えたことや選択・判断したことを適切に表現するような授業展開が出来ているとは言い難い。そこで、本研究では、児童自らが考え、表現することができるように、「集合知」という手法を取り入れ,思考力・判断力・表現力を育むために本主題を設定した。

Ⅱ　研究の仮説

自ら進んで課題に対する答えを探し、互いに意見を出し合う「集合知」という手法を取り入れることで、児童はより深く考え、課題に対するまとめを導き出すことができるであろう。

Ⅲ　研究の実際

集合知とは、インターネットの世界における造語で、たくさんの人の意見や知識を集めて分析すると、そこからより高度な知性が見出せるというものである。集団的知性とも呼ぶ。簡単に言えば、みんなで行う調べ学習ということになる。（山口県公立小学校教諭　河田孝文氏の書籍より）

集合知の授業の手順は以下の通りである。

① テーマについて調べたことをノートに箇条書きしていく。
② ノートの中からいくつか選んで黒板に書く。
③ 黒板に書かれたことについて，質疑・応答・修正する。
④ キーワードを選ぶ→ノートに赤線を引く，書き加える
⑤ キーワードで文を作る。（資料集のまとめの文を引用する）

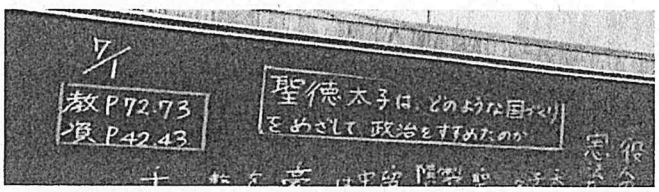
１　課題設定の工夫

児童に課題を提示する際には、教科書にある「めあて」と資料集にある「めあて」の両方を活用した。その際に、どちらがより児童が課題に迫りやすい課題となるかを考えた。時には、教科書と資料集の両方の文から作る「めあて」もあった。また、両方を参考にして、自分で「めあて」を考えることもあった。

「天皇を中心とした政治」の内容においては、

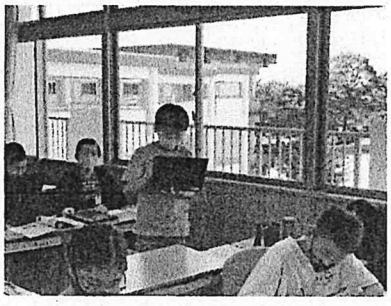
教科書のめあては、「どうして大きな寺が作られたのだろう」である。それに対して資料集のめあては、「聖徳太子や中大兄皇子らは、どのような国づくりをめざして、政治を進めたのでしょうか。」であった。そこで、本時のめあては、「聖徳太子は、どのような国づくりをめざして、政治をすすめたのか。」とした。児童は、課題に対する考えを多く出すことができた。

2　ICT の活用



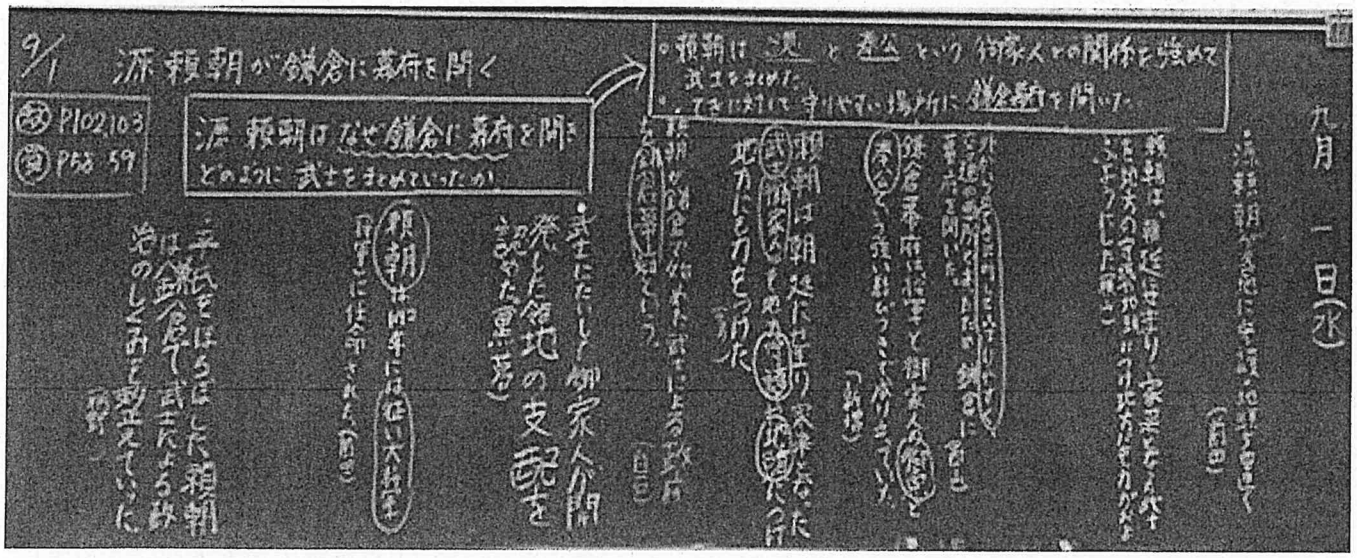
児童は、課題に迫るために教科書の内容や資料集だけでなく、パソコンを活用することもあった。今年度から市内の小学校に導入された。児童にとって、慣れることに時間は掛からなかった。より深く知りたい時や画像等が資料集等に不足している際に活躍した。また、黒板に板書した内容についての質問に対してもパソコンを活用して答える児童の姿も見られた。

3　まとめ方の工夫



児童が黒板に書かれた様々な意見の中から、大切な言葉（キーワード）を選ぶことができるようになった。その言葉を繋ぎ合わせて、課題に対してのまとめの文章まで作ることができるようになった。

児童たちは、「源頼朝はなぜ鎌倉に幕府を開き、どのように武士をまとめていったのか」という課題に対して、黒板のような意見を出し、その中で「御恩　奉公　武家　御家人　守護　地頭　鎌倉幕府　頼朝　征夷大将軍」等の言葉が大切だとして、キーワードとした。そして、まとめとして、「・頼朝は御恩と奉公という御家人との関係を強めて武士をまとめた。・敵からの攻めに対して守りやすい場所に鎌倉幕府を開いた。」という２つの内容をまとめた。

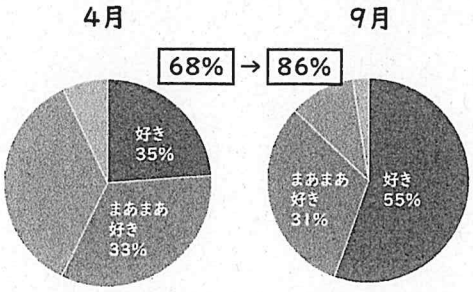


Ⅳ　研究の成果と課題

○　社会科が好きと答える児童が増えた。

○　主体的に学ぶことができるようになり、まとめまで導き出すことができるようになった。

●　児童数が４０名の為、全員が黒板に書くことができなかった。そのため、黒板に書く児童も固定化しがちになった。



研究主題

第６学年

自ら学び、考え、社会を拓こうとする子どもを育てる社会科学習
～具体・抽象を行き来する単元・授業構成の工夫～

椎葉村立椎葉小学校　教諭　山田　愛

Ⅰ　主題設定の理由

第６学年における社会科学習指導にあたって、思考に要する時間の確保、学習進度の速さなど、１単位時間において習得させることと思考させることがあふれていることが課題として挙げられる。これらの課題に向き合うため、なぜ社会科を学ばなければならないのかという疑問に立ち帰り、当時の人々の願いや努力と向き合って考えさせる活動の導入に努める必要があると考えた。

そこで、１単位時間において、資料をもとに具体・抽象を行き来する学習活動に焦点を絞り充実させれば、児童は、自ら資料を読み解き、自分の考えをもつようになるのではないかと考えた。

本研究では、社会科学習における単元・授業構成等の工夫、社会的事象の意味を明確にする教材分析の工夫により、これからの社会を見つめ、拓こうとする子どもの育成につながる社会科学習に迫りたい。

Ⅱ　研究内容

１　単元を貫く学習問題の提示の在り方

２　学習指導過程における具体・抽象の位置付け

３　「選択・判断」を取り入れた表現活動の充実

Ⅲ　研究の実際

１　単元を貫く学習問題の提示の在り方

児童が単元全体を見通して主体的な学びが展開できるよう、社会的な見方・考え方を働かせた課題設定にあたった。その際、学習指導要領に示された社会的事象の見方・考え方のとらえ方を資料選定の際のポイントにし、当時の人々の思いや願いに迫った。

ア　位置や空間的な広がり

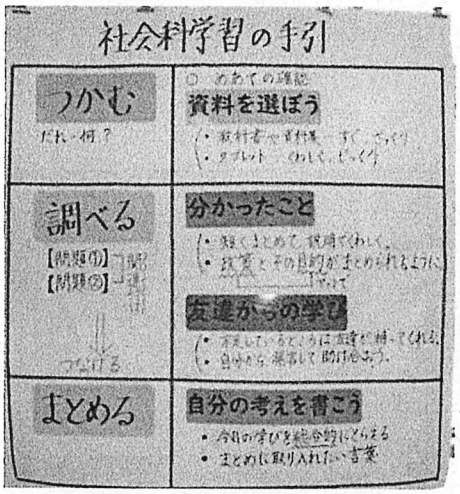
イ　時期や時間の経過と事実との関係

ウ　事象や人々の相互関係

２　学習指導過程における具体・抽象の位置付け

学習指導過程を「つかむ」「調べる」「まとめる」の３段階に設定し、児童の気付きや調べた結果をつないで究明できるようにした。

「つかむ」段階では、児童が調べてみたいと思える導入の在り方を工夫する。また、問題解決型のめあてを設定することにより、「まとめる」段階においても整合性を保つことができるよう意識させ、問題解決することの楽しさを感じることができるようにした。

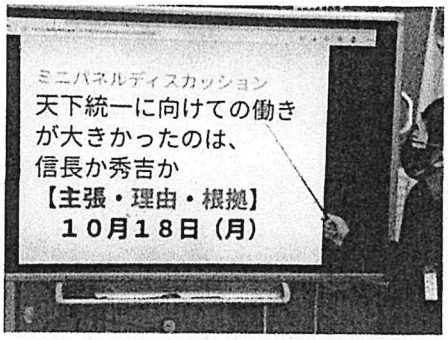


【社会科学習の手引】

「調べる」段階では、複数の問題に対して導いた結果を児童が比較・関連・統合し、「まとめる」段階において考えを共有できるようにした。

3　「選択・判断」を取り入れた表現活動の充実

単元の導入段階で予め与えられた問いに対して、終末段階に自分の考えを明確にする活動に取り組んだ。児童は、単元全体を通して学んだ事象を根拠にして、自分の考えを選択・判断し、互いに意見を伝え合うことができた。



【二者択一の活動における児童の様子】

ア　二者択一の活動による充実

単元「戦国の世から天下統一へ」では、全国統一に大きく影響を及ぼしたのは、織田信長か、豊臣秀吉か」のテーマを提示し、学んだことをもとに理由や根拠を列挙させ、児童が自ら考えを選択して表現できるようにした。

イ　新聞製作による充実

単元「江戸幕府と政治の安定」では、単元導入に際し、「なぜ江戸幕府は約２６０年間も続いたのか」というテーマを提示した。本単元６時間における学びを通して、単元終末では、結論、理由、根拠を明確にさせた。

【児童の製作した新聞】

ウ　調べた情報を収集・整理する活動による充実

単元「日本とつながりの深い国々」では、世界の国々について調べた情報をもとに、単元終末において「アメリカは○○な国」などのように、児童の気付きを言語化させ、情報を抽象化させた。

Ⅳ　研究の成果と課題（○…成果、●…課題）

○　単元を貫く学習問題の提示を工夫することにより、児童の疑問点や気付きを生かし、主体的な学びにつなげることができた。

○　学習指導過程に具体・抽象を位置付けることにより、学習の流れを意識させ、学びのまとめを自ら考える場を充実させることができた。

【表現活動の充実】

○　選択・判断を取り入れた表現活動を充実させることにより、児童に当事者意識をもたせ、相互に考えを比較したり、異なる意見によって学びを深めたりする様子が見られるようになった。

●　児童の気付きや発想をどう引き出すか、指導者は想定しておくことが重要である。

●　社会的事象のつながりについては、言葉の意味を理解していてもどうつながるかとらえられない児童も増えている。社会科を総合的な情報学習に仕向ける必要性を感じた。